

示唆されたが今後の更なる検討を要する。

5 末端肥大症患者における糖代謝の解析

羽入 修・山谷 恵一・戸谷 真紀
小林 千晶・佐藤 隆之・宗田 聡
平山 哲・鈴木 克典・中川 理
相澤 義房

新潟大学大学院医歯学総合研究科
内分泌代謝学分野

【背景】末端肥大症では増加したGHによりインスリン抵抗性と高インスリン血症を呈するが耐糖能障害は比較的軽度に留まることが多い。これには血糖低下作用や膵β細胞増殖作用を持つIGF-Iが関与している可能性がある。

【目的】末端肥大症のインスリン分泌能および感受性とGH、IGF-Iとの関連性よりIGF-Iの膵β細胞に対する影響を検討する。

【方法】末端肥大症5例に対しHardy手術前後にミニマルモデル解析を施行した。

【結果】末端肥大症は2型糖尿病に比しSiは同等であったがAIRgは有意に高かった。AIRgはHOMA-RとIGF-Iに正相関しFPGに負相関した。

【考案】IGF-Iは培養細胞や糖尿病モデル動物において膵β細胞増殖作用が報告されているがヒト膵β細胞への影響は不明である。今回末端肥大症でAIRgが高い機序として①GHによるインスリン抵抗性②IGF-Iによる膵β細胞増殖作用の関与が示唆された。また耐糖能障害が軽度に留まる機序としてIGF-Iによるインスリン作用増強効果に加え膵β細胞増殖作用が関与する可能性が

6 副甲状腺機能亢進症を契機に発見された褐色腫 (brown tumor) と副甲状腺癌の1例

宮腰 将史・鴨井 久司・金子 兼三

長岡赤十字病院糖尿病センター

55歳女性。膝と腰の痛み出現し婦人科外来受診。骨粗鬆症と診断され加療。経過中、高Ca血症、intact PTH高値であり、副甲状腺機能亢進症を指摘された。CT、MIBI副腎シンチ等の画像検査で、左副甲状腺腫瘍、多発骨病変を認めた。経過と合わせると、副甲状腺癌、多発骨転移が強く疑われた。

副甲状腺腫瘍と肋骨の摘出術施行。病理診断では、それぞれ腺癌、褐色腫であった。

術前のMRIにて、左第3肋骨の骨病変はT1、T2強調画像ともに低信号を呈し、内部に一部造影される充実部分を有していた。これらは褐色腫に典型的な所見である。

副甲状腺癌に合併した骨病変の術前評価の際、転移癌との鑑別にMRIが有用となる可能性があると思われた。

II. 特別講演

「甲状腺機能亢進症は内科的治療でどの程度よくなるのか、治療の注意点と実際」

国家公務員共済組合連合会三宿病院院長

紫 芝 良 昌